

# 光の巨人を目指す

目指せ焼豚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは物語の主人公である緑谷出久が、中学2年生までであるヒーローに出会う前に、出久自身が前を向き、胸を張ってヒーローを目指すきっかけをくれる『光の巨人』に出会っていたら？

これはそんな話。

# 目次

プロローグ	1
巨人との出会い	5
『光』を目指す少年とN.O. 1ヒーロー	10
覚醒の兆し	15
決意と入試	22
示せ！光の力	35
ヒーロー基礎学	50
委員長決めと黒い影	67
USJ事件 前	73



## プロローグ

緑谷出久が小学六年生の時、ある出来事に巻き込まれる。

本来の物語の流れでは絶対出会うことのない、光の巨人と出会うことで、緑谷の物語はまた違った方向に進んでいく。

「言われたんだ……、”人は光になれる”って。僕も、”光”になれるって！」

――U S J――

脳無に相対する出久は、背中に蛙吹と峰田、相澤を隠すように立っていた。

「もうこれ以上……好きにはさせないぞ……敵<sup>ライバル</sup>！」

「へえ……勇敢だなあ、君。怖くないの？」

目はまだ闘志を宿している出久を見て、大量の手をつけた男……死柄木は拍手をしながらそう聞いた。

だが、そのセリフに表情を変えずに出久は拳の構えを解かず、警戒を続ける。相手の方を向きながら出久は震えている蛙吹と峰田に声を掛ける。

「あす……梅雨ちゃん、峰田くん、相澤先生を連れて入り口のところへ急いで」

「なっ……何言つてんだよ緑谷!!」

「そうよ……みんなまで逃げましょ」「誰か一人でも敵の相手をして時間稼ぎをしないといけない。なら僕が一番適任だ」……緑谷ちゃん

残ろうとしている出久に蛙吹と峰田は説得を試みようとするが、正論を返されてしまいい出久の名前を呼んでしまった。その声に恐怖の色が混じっているのに気が付いたのだろう、出久は二人の方に振り向き笑顔を見せながら安心させるように語りかける。

「大丈夫、梅雨ちゃんたちが逃げ切ったら僕も逃げるから」

出久の笑顔に何かを感じたのだろう。蛙吹と峰田は相澤を連れてその場を離れてU SJの入り口に向かっていく。出久はそれを見て、もう一度死柄木に顔を向けた。

「結局君が残るのか。全員死ぬんだから早いか遅いかなのに」

「そんなこと、僕がさせない」

そう言つて出久は拳を握るだけだった構えから右足を一步前に出し、左手を握った状態で胸のあたりに、右手を手刀に変えて前に出した構えに変えた。するとその瞬間、出久の首に下げてあつたネックレスに付いていた水晶が『金色』に輝き始め、その光は出

久を包んでいく。

「いくぞ、敵!!」

「やれ、脳無」

深く深呼吸して叫びながら出久は走り出し、死柄木は脳無に指示を出す。

金色の光に包まれた出久は、自分の頭の中に情景を燃やし向かってくる脳無に拳を振るう。

これは、緑谷出久がオールマイトから受け継いだ聖火で最高のヒーローを目指す物語ではない。

これは、緑谷出久が光の巨人を目指し、「人々の光」を目指す。そんな物語だ。

さあ、物語を始めよう。

これはその一項目だ。

## 4 プロローグ



## 巨人との出会い

世界総人口の八割が“個性”と呼ばれる不思議な特殊能力である力を持つ超人社会。ある時、中国で光り輝く赤ん坊が生まれ、世界は新しい時代になっていく。不可思議な能力、のちに個性と改められる力を持った人間たち。『超常黎明期』とも呼ばれたその時代の中で徐々に個性という力は超常というカテゴリーから常識というカテゴリーに変化していった歴史を持った世界が存在する。その世界では個性は当たり前、常識であり強い個性で在れば憧れを持たれたり将来への道を開けるといふ事もある。

だが、総人口の二割に当たる個性を持たないものたち…その能力の無い者は“無個性”と呼ばれ、蔑まれてるのが今のこの社会でもある。

個性社会は新しい時代を築く一方で、無個性に対する風当たりを強くする環境を作ってしまった。

そんな個性社会で、無個性でヒーローを目指す少年が早速その環境での洗礼を受けた。

少年の名前は「緑谷出久」。彼はヒーローを目指し個性が出るのを心待ちにしていた

が、結果は個性『なし』。

出久は“無個性”だったのだ。

そして、その“無個性”というところから容赦のない洗礼を受ける。

幼稚園などの同年代は出久の“無個性”というところから、自分より下の存在として見ていじめを、幼稚園の職員も“無個性”からいじめを見向きもしない、関わりたくなかつたのだろう。

そんな環境で育っていった出久が、塞ぎ込んだ暗い子供に成長するのも時間の問題だった。

ヒーローには憧れているが、“無個性”であることや、「無個性にヒーローなんかできるはずがない」と周りから馬鹿にされていたことから自身の心の中にも「ヒーローにはなれない」と諦めている節があった。

そんなくらい日常を過ごし、中学に入学てすぐの頃、出久は夢を見るようになった。

今までは周りの環境から逃げるようにヒーロー知識をノートで分析し、泥のように眠るような毎日だったからか、夢などを見ることはないはずだった。

夢の内容は、やけにリアルだった。

時代はおそらく個性が生まれるより前のかなり昔。だが、教科書とかで学ぶような内容とは違う、2007年ごろ。核兵器や公害などが完全に廃絶した世界で、東京はメトロポリスと呼ばれていた。

そんな世界で起こっていたのが「怪獣」と呼ばれる怪物や地球を侵略しようとしている宇宙人達との戦いだった。

そしてその戦いに現れた超古代の『光の巨人』と、それに変身する特捜隊の青年の記憶を出久はみた。

光の巨人との融合から、戦い、敗北そして……復活。

人々が希望をたやみせずに、『光』になり戦った勇敢な記憶を見て出久は思った。

自分もこの青年……いや、この世界のような人たちになりたいと

そう思った瞬間、出久は一面真っ白い空間にいた。

何事かとあたりを見渡したら自分以外にも人がいたことに気がついた。

その人は記憶で見た特捜隊の隊服に身を包み、超古代の英雄戦士の遺伝子を受け継いだ「光であり、人である」青年——マドカ・ダイゴだった。

たまたま出久はその人に向かって叫んだ。

「僕もあなたのような……あなた達の世界の人たちのようになれますか!!」

そう言った出久にダイゴは微笑みながら答えた。

「なれるさ。最後まで諦めなければ…みんなが『光』になれるのだから」  
ダイゴは出久に近寄り、綺麗な金の模様が入った白い水晶のネックレスを出久の首にかけて頭を撫でる。

そして、とびっきりの眩しい笑顔でこう言った。

「人は光になれる。もちろん、君もね！」

その笑顔を見て出久は夢から覚めた。

起きて辺りを見回すと、いつもの自分の部屋。いつもなら憂鬱な感情が出久の頭の中を支配するのだが、今日は違った。

例え夢の中でも、自分は『光』になれると言ってもらえたのだから。

出久の表情には今までの暗いものはなく、自分の目指すものになるために努力する決意に満ちていた。

決意を胸に早速と言った感じで何も書いていないノートを手にとると、出久は自分のためのトレーニングメニューを様々な本やヒーロー分析ノートを参考に組み立てていた。

そしてその出久を、首にかけていた水晶のネックレスが、彼の行動を見守っているように淡く光っていた



## 『光』を目指す少年とNo. 1ヒーロー

あの夢を見た日から、出久は自分の目標に向かって走り続けていた。

周りは「できっこない」と馬鹿にする者もたくさんいたが、出久は周りを気にしなかった。

今までしてこなかったトレーニングや、ヒーローの原点である奉仕活動のために近隣の公園のゴミ掃除。変わらずにヒーロー分析の毎日。

無個性なりに自分がヒーローになるための努力をして、身体的にも精神的にも成長した出久。

現在の身長は175センチ。体格もモヤシではなくガッチリと服の上からもわかるくらいには鍛えている。

そして何より、本来の物語のこの頃にはない自信が目に満ちていた。

「全く、かつちゃんもみんなも容赦ないなあ」

そんな出久は現在、幼馴染のかつちゃん……爆豪に爆破されたヒーロー分析ノートを回収しに鯉の水槽に来ていた。

鯉が餌だと勘違いしているノートを水槽から取り出し、バサバサと軽く振るう。

「あちやー、これは新しいノートにしたほうがいいな……」

そう言いながらノートをリュックに入れる出久。

そもそもこうなったのは朝の出来事が原因だ。

中学3年生の春。個性のある超人社会のいまでも変わっていない。

ヒーローを目指すものは、ヒーロー科のある学校に進学するものがほとんどだ。

もちろん出久もヒーローを目指すために、ダイゴと夢の中で出会う前から尊敬してやまない人物ヒーローと同じ学校を受験しようとしていた。

それが、担任の不注意で志望校を晒されてしまい、同じクラスの人達の侮蔑と嘲笑の的になっていた。そして幼馴染からは暴言を吐かれ、彼の個性によって威嚇されたのだ。

爆豪である。

彼は頭脳明晰、運動神経抜群にして『爆破』という優れた個性を持ち、幼いころから長年出久を『デク』や『クソナード』と虐げてきたヤツだった。昔はよく一緒に遊んだりしていたが、いつしか爆豪は出久を目の敵に、出久は爆豪が苦手な、そんな関係になっていた。

本来の物語なら、出久はその時に悔しさやいろんな感情がごちゃ混ぜになり言い返せ

なかったが、今回の出久は違う。

この物語の出久はもう『光』<sup>ヒーロー</sup>になれると言ってもらっているのだから。

「かつちゃん：僕は君に何を言われようと雄英を受けるよ。そもそも自分の人生なんだから君に決定権はないはずだ、僕も僕の道を行くんだから勝手にすればいい」

「んだとお…このクソナード!!」

出久の言葉が癪に触ったのかキレながら向かってきた爆豪。冷静な出久は向かってきた爆豪の“大振りの右手”を爆破される前に弾くと、そのまま隙だらけの左手を掴んでそのまま背中にして締め上げる。ここ最近はいつもこうだ、馬鹿にしてくる爆豪に出久はあしらう毎日。正直うんざりしていた。だから面倒になって爆豪を離れたタイピングで放課後のチャイムがなったので、出久はさっさとカバンを持って出ていったのだ。

机に普段はカバンに入れっぱなしのヒーロー分析ノートを、今日に限って学生机に入れたことを忘れて。

思い出し慌てて教室に戻ってきた時にはノートはなく、やっと見つけたのがこの水槽だった。

「自分のシナリオ通りの道を生きたいんだらうけど…僕を巻き込まないでほしいよ全



く……」

出久は帰路につき歩きながらそうボヤク。

憂さ晴らしに買い食いでもしていこうと商店街に向かおうとした瞬間に不穏な気配を出久は感じ取った。

咄嗟にその場から飛び退くと、先ほどまでいた場所のマンホールの蓋が吹き飛ばされて異臭を放つヘドロがそこから出てきた。

「Mサイズの隠れ蓑おくなあボウヤ、ちよつとその身体貸してくれよお……大丈夫、大丈夫、苦しいのをたった45秒ガマンしてくればあとは楽だからさあ」

いきなり喋るヘドロ。言動から推測するに『ヘドロ』の個性を持ち、それを違法に扱う者『敵』<sup>ヴィラン</sup>だ。言動から察するに恐らく警察やヒーローから逃走中なのだろう。お生憎さま出久は自分の目標に向かうために鍛えてきた体を譲る気は一切ない。幸いこの場所は住宅街のど真ん中なのでこのヘドロヴィランを追跡しているヒーローがいるはずだ。

いくら無個性とはいえ、仮免を取得していない学生がヴィランと戦うのはよろしくない。

出久はバックを道路の隅に放り投げて、関節をほぐしながら相手を躲し続けるための準備をする。

しばらくここで粘っていれば騒ぎを聞きつけたヒーロー来る。なら自分は時間稼ぎをしようと思えを取った。

「なんだく？俺とやるのか?！」

ヘドロは構えを取った出久を見てニヤニヤ笑いながら見る。

出久が地面を蹴ろうとした瞬間に、出久とヘドロ以外の第三者の声が聞こえた。

「安心したまえ少年!」

その声は、出久が尊敬しているヒーローと同じもので。

「なぜって?」

ヘドロヴィランを爆散させるほどの拳圧の持ち主で、No. 1ヒーローの。

「私が来た!!」

「お、オールマイト……」

筋骨隆々でムキムキな体躯と不敵な笑顔が特徴のNo. 1ヒーロー、オールマイトの姿がそこにあった。

## 覚醒の兆し

あの後、オールマイとはヘッドロヴィランをペットボトルに詰めて拘束し出久に怪我がないか確認してきた。

出久は尊敬しているヒーローを目の前にして少し慌てたものの、握手とサインを求めた。ちやつかりしている。

「おつといけない、すまないがこいつを警察に受け渡してこないといけないのでね！」  
「あつはい！あの…いや、なんでもないです。これからも頑張ってください！」

「H A H A H A ご声援ありがとうございます!! トウアツ!!」

そう言つて飛んでいったオールマイトを見ながら、出久は書いてもらったサインを見る。

（『無個性でもヒーローになれますか』か……なんで答えなんてわかつてるはずなのに、聞こうとしたのかな僕……）

そう、最後に出久は聞こうとしたのだ。答えなんて反対されるなんて分かりきつてるのに。

「無責任になれると言つてくれるほど、現実には甘くないなんて何度も確認してるのに

な」

出久は鍛えるさなかヒーロー分析のついでに現場に行き何回か質問をしたことがある。

『無個性でも、ヒーローはできますか?』と。

だが結果は言葉は違えど言っている意味は同じ。

『無個性ではヒーローになれない』

最初は少し凹んだが、そんな言葉を言われて揺らぐほどの夢を持っているわけでもない。

すぐに切り替えてサインをカバンにしまつて商店街に向かった。

◇◇◇

商店街に向かうと何やら騒がしい。

何かあったのかと思ひ騒がしい方に向かつていく。

騒がしい場所に行く可他が集まっついていて、中心にはヒーローがいるのが見えた。

そして何より、つい先ほど見た流体のものに取り込まれそうになっている幼馴染が

……爆豪がもがいている事に驚いた。

「かつちゃん……!?!」

現場を詳しく見てみると『混沌』というのがよく似合う惨状になっていた。

取り込まれまいともがいて個性を発動させ周りを爆破して、爆風で窓ガラスを粉々に。地面のアスファルトや道路に穴を開けて周りを破壊していく。

中心に居るのはデビューしてから華々しく活躍しているMt.レディや新進気鋭のシンリンカムイ、デステゴロなどのそこそこの知れたヒーロー達だが、流動体であるヘドロや爆豪の個性である「爆破」に有効的に対応できる個性を持つているヒーローはいなかった。

出久は見ているだけどのヒーロー達の動きを見て首を傾げる。確かに有効な個性はいないが、流動体を固めるだけなら商店街にでもありそうな凝固剤の代わりにヘドロヴィランにでもかけることで動きを阻害など結構やり用はあるはずなのだ。例を挙げればセメントや簡易トイレの凝固剤などである。

出久がそう考えながら見ていると声が聞こえた。

「駄目だつ、誰か有利な個性のヒーローが来るまで待つしかねえ!!」

「何、すぐに誰か来るさ!!あの子には悪いが、それまで耐えてもらおう!!」

ヒーロー達の待機とも取れる言葉が聞こえた。

確かに現役のヒーローとしての判断としては最善だ。だが、その言葉が出久の琴線に

触れた、そして何よりこっちを見ている爆豪の顔を見た出久に、助ける以外の選択肢なんてなかった。

出久は完全に見ているだけとなったヒーロー達を突き飛ばしながら走り出す。

後ろのあたりから何か聞こえるが、今の出久は気にしなかった。

出久は自分のリュックをヘッドロの目の当たりに投げ込んでさらに脚に力を込めて走り出し――

その瞬間、出久の首から出ていたネックレスの水晶から金色の光が溢れ出した。

出久はその光がああの際に夢に見たものと同じものだと感覚的に感じると、それを足に集中させるようなイメージをする。

そのイメージをした直後、出久の足にブースターでも着いたかのようなスピードで、リュックが目当たって拘束が緩くなっていた爆豪を掻っ攫うように奪っていく。

奪った瞬間にブレーキをかけた出久。

だが光の力でブーストされた足の勢いが止まったのは、予定の場所より数十メートルも遠い場所。

出久は自分足がどうなってるか確認するがどこも怪我をしていない。だが、すぐにそ

のことを頭の隅に追いやった。事がまだ済んでいないのだ。

「デメエ、何をしやがる……!!」

ヘドロヴィランは怒りながら爆豪を奪った出久に向かってきた。

出久は掻つ攫つた爆豪をゆつくりと地面に下ろしてヘドロヴィランの方を振り向き、直感に任せるままに両腕を腰の位置まで引き前方で交差させた。

先ほどまで両足に集まっていた光は今度は両腕に収束していき、大きく左右に腕を広げていくことで輝きを増して光は白くなっていく。そして腕をL字に組んだことで技が放たれる。

出久はこの動きを知っている、無意識的に技名を叫んでいた。

夢に見た光の巨人が使っていた、L字に組んで放つ白い超高熱光線——

「ゼペリオン光線!!!」

少し地面を削りながら放ったその白い光線は、ヘドロヴィランに突き刺さり絶大な効果をもたらした。

「グギャアアアアアアアアアア!!!??」

阿鼻叫喚と言わんばかりの絶叫が周囲に木霊する、全身にエネルギーが伝導していき

全身が爆発しようとしているかのような感覚を覚えながらも限界を迎えたのかヴィランは倒れこむ。

そして数秒間の沈黙の後、出久は終わったと思いきその場にへたり込んだ。

「ふう……終わった〜」

気の抜けた声を出しながら息を吐く出久。

そこに声をかける者がいた、爆豪である。

「デク……何で助けた…」

小さく、聞き取りづらい声であったが確かにそう聞いてきた爆豪、その声色に色々な感情が混じっているようにも思えた。出久は爆豪の方を向きながら答えた。

「確かに、君にはいろいろ嫌なことされたけど……あの時の顔を見たら、体が勝手に動いたんだよ。それに……」

君が、助けを求める顔をしてたから

は、ないよ」

それ以外に理由

「そう、か……」



理由を聞いて、爆豪は何か考えるような仕草をして黙り込んだ。

出久はへたり込んだ状態から、ヘドロヴィランを捕縛し終わったヒーロー達がこっちに寄ってくるのを見て説教を覚悟した。だが今回した事に後悔はない、出久はいつの間にも金色の光を発しなくなっていた水晶を待ち、晴れ始めている空に掲げた。

「僕も、あなた達のように……できましたか？」

出久に返事をするように、水晶は今度は白く光った。

まるでその光は、緑谷出久が『ヒーロー』としての物語の1ページ目を祝福しているよう。

兆しを見せた、「光の巨人を指す」者の覚醒は、近い。

## 決意と入試

あの後、ヒーロー達に説教を受けた出久。

最終的に解放されたのは、夕方になった頃だった。

「はあ……思ったより長くなっちゃった……」

帰路につきながらため息を吐く。

歩きながら出久は、首にかけている水晶を持ち上げて空にかざす。

「あの光……ダイゴさん達が力を貸してくれたのかな？」

出久は水晶を見ながらあの時の光の力を思い出す。

（あの光が僕を包んだ時、“無個性”の僕では考えられない身体能力が発揮できた……それにあの光線も）

「でも、多分あの光……まだまだ先があるんだろうなあ……」

なんとなくだが、あの光の力を全然引き出せていないのはわかっていた出久。これからは普段のトレーニングの他に、あの光の事についても研究もしなくてはいけない。や

ることはたくさんある。

「よし、もつと頑張るぞー！」

出久は空にかざした水晶を見ながら叫んだ。

決意を新たに、『光』に認められた少年はさらに夢へ向かうためのスピードを早めた。

◇◇

世間ではヘドロ事件と呼ばれたあの出来事からずいぶん経ち、現在は雄英入試当日。

出久は試験会場でもある雄英高校にきていた。

「大きい……」

校舎の大きさに圧倒される出久。

だが、すぐに首を横に降って気合いをいれる。

（トレーニングも、あの『光』の研究もできる限りした……あとは、自分が本番でそれを発揮するだけ！）

「スウー……ハア……よしー！」

深呼吸をした出久は、気合いを入れて雄英高校の敷地を一步踏み出した。

場所は変わって校舎中。どこの高校にでもある学科試験を終えた出久は、実技試験の説明が行われる会場に向かっていった。

大学の講義を行うような大きな講堂のような会場で、それぞれの席に受験票が振られており出久はその中から自分の席を見つけるとそこに座る。説明の前に軽く最後の復習をしようかとリユックから実技入試の作戦ノートを取り出したあたりで、自分の左側にドカツと座る音。爆豪だった。

「やあつかっちゃん」

「……おう」

出久の言葉にぶつきらぼうに返事した爆豪は、それ以外は何も言わずに目を瞑り瞑想するかのようになつた。

あのヘドロヴィランの事件以来、爆豪は緑谷に突つかかることはなくなり、何かよく考えるように寡黙に過ごすことが多くなつた。それ以上のことは出久はよく知らないが、今までつるんでいた出久を馬鹿にするもの達ともつるむことは無くなつていたことから何か心変わりがあったのだろうとぐらいにしか出久は考えていなかったが。

『今日は俺のライブにようこそー！ エヴェイバデイセイハイ！』

午後の実技試験の説明を行うのは雄英高校の教師でありプロヒーローの一人、プレゼント・マイク。

人気ラジオDJでもある彼のノリノリな掛け合いだが、誰も反応を示さない。と言うか突然過ぎて示せない上にノリにもついて行けなかった。

『こいつあ、シヴィー！ 受験生のリスナー！ 実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!! アーユーレディ!? YEAHHHH!!』

この言葉にも受験生は反応を示さなかったが、プレゼント・マイクは凹む言葉説明を開始した。

そこからプレゼント・マイクの言葉に応じてどんどんスクリーンに資料画像が展開されては消えていくのを繰り返した。

『実技試験の内容は10分間の模擬市街地演習だ! 装備品の持ち込みは自由!! ただし、他の受験生を攻撃するなどの妨害するのはNGだぜ!』

1から3ポイントが割り振られた仮想ヴィランロボットを撃破していき、合計点数を競うと言う内容だった。更に0ポイントのお邪魔ギミックが出現するらしい。出久は今回の試験のために準備をしていた作戦の中から最適そうな作戦を頭の中でピックアップしていく。その間に例の非常口が質問をしていたのは言うまでもないだろう。

『かの英雄、ナポレオンⅡボナパルトは言った！『真の英雄とは、自身の不幸を乗り越えて行く者』と!! Plus<sup>さくら</sup>に<sup>向</sup>Ultra<sup>こう</sup>!! それでは皆、良い受難を……!!』

説明を受けた出久は他の受験生と共に試験会場に移動していた。

動きやすい運動着に着替えて柔軟をしている出久、首にはいつものペンダントをつけている。他の受験生はベルトをつけた男子や自分の個性にあつた道具を持っている生徒が思いのほか沢山いるようだ、出久のように運動着に着替えただけの方が少ないようにも見える。個性が戦闘向きではない場合やサポートアイテムなどの道具がない場合も身体能力に障害が出る人は戦える手段が限られてくるため、サポートアイテムなどを申請すれば使うことができる。武器などを持っているヒーローもいるのでなんら違和感ない。

出久は柔軟を終えたあと、一人スタート地点ギリギリに立つて開始の合図であるプレゼント・マイクの言葉を待っているのだ。

実戦に合図なんてのはない。それはダイゴの世界の夢を見て、GUTSの隊員達の姿を見てわかつている。あの世界での戦いや事件は突発的なものがほとんどで、むしろあ

からさまざまな合図や予兆がある方が珍しい。それはヒーローも同じなはずで、突然合図があつてもいいように出久はいつでも走り出せる体勢を維持する。

出久以外の受験生が気が緩んだ状態でいると、プレゼント・マイクの声が近くのスピーカーから響き渡った。

『ハイ、スタート!!』

出久はその声を聞いた瞬間に走り出し、すぐに近くに現れた「IP」と書かれたロボットの頭部を右手でストレートを放ち、破壊する。

そのまま次の標的を探しに走り回った。

『HEYYYYYYYY! どうした! どうした!? 実戦じゃカウントダウンなんざねえぞ! 走れやHURRY UP! 賽は投げらてんゾYEAH!』

その出久の姿を他の受験生たちはポカンと見ていたが、すぐにまた聞こえた放送で一気に走り出した。

出久は走り続けながらロボットたちを頭部や、関節部分を中心に殴る、蹴るをして破壊していく。戦い方は、あの夢で見た光の巨人の動きを知っているなのでそれを自分流にアレンジしたもので、もともとあの『光』をあのヘドロの時に手に入れる前から考えていたものだ。拳や蹴り技を主体にした近接戦闘…出久はこれまで山のように分析したヒーローたちの動きや、技を参考に少しづつ、少しづつ組み立ていった。そして、今の

その行動は結果として現在現れている。

「いける……！」

出久は自分の拳を見ながらそう呟き、また走り出す。

しばらくロボットを破壊しながら会場を駆け回っていると、ベルトをつけた金髪の男子がお腹を押さえた状態でロボに囲まれていた。

「お、お腹が……」

そう言っただけで蹲ってしまった男子に周りを囲んでいたロボは好機とばかりに攻撃をしようとする。

出久の今いる場所からだとは離れていて間に合わない……普通なら。

「ダイゴさん、お借りします!!」

そう出久は叫ぶと頭の中で鞘から剣を抜くようなイメージをしながらペンダントの水晶を掴んだ。

するとヘッドロヴィランの時と同じような金色の光が溢れて掴んでいる右手に集約していく。出久はこの受験日までの間に、『光』をある程度操作できるようになっていた。自身が戦うことや人を助けることを強く意識した状態で先ほどのように鞘から剣を抜くようなイメージをすることでヘッドロヴィランの時ほどではないが一時的に『光』を操作でき、その力を使うことができる。



そしてそのままペンダントから右手を離して、左手を拳に変えた状態で甲を下にして引き絞り、その左手に光が収束された右手をかざす。

「ハンドスラッシュユ！」

技名を叫びながら、左手にかざした右手を男子を囲うロボに向けると、その右手から手裏剣状の光線が発射されてそのロボを破壊した。

そのまま光線を連射することで他のロボも破壊すると出久はその男子に駆け寄り、肩を貸す。

「大丈夫……？」

「ああ……個性の副作用みたいなものだよ」

出久は男子をスタート位置に移動させて、座らせる。

それからすぐにロボを探しに行こうとすると男子から話しかけられた。

「ねえ……どうして君は僕を助けたんだい？」

その質問に出久はなんでもないように答える。

「？ヒーローは助け合いでしょ。それに、体調が悪い人を放っておけるほど僕は非常にじゃないしね！」

そう答えて出久は走り出した。その姿を見ていた男子は、なんとなく彼は合格するのだろうか……と感じ、自分も頑張ろうとまずは体調を整えるのだった。

そこから男子は、他の受験生のピンチを助けることを中心に活動し、無事に“例のポイント”で合格に漕ぎ着けたのだった。

そこから数分……あと一、二分と言ったところで試験終盤、急に試験会場が大きな揺れに包まれる。

受験生達は地震かと少し動きが止まるが、すぐにその揺れの発生源が顔を出した。揺れの正体はプレゼント・マイクが講堂で説明していた時に離していた0ポイントのお邪魔ロボだった。ただ、他のロボット達とは違い、大きさが桁違いだった。数十メートルある会場のビル群と同じ大きさなので、かなりの大きさを誇る。並の大きさではないので受験生達は逃げ始める。

元々お邪魔、ポイントにもならない。勝機もないなら自分は関係ないと逃げ始めるのはある意味効率といった観点からは正しいのだろう。

だが、強大なヴィランに背を向けて逃げるのは“ヒーローを目指す者”としていいものなのかと出久は思い立ち止まる。

そして立ち止まったことで出久はあることに気がついた。

お邪魔ロボットの近くに逃げ遅れた女子がいたのだ。女子の足はお邪魔ロボが登場

した時に破壊された瓦礫に挟まり、動けないでいた。

出久はお邪魔ロボに向けて走り出した。

ペンダントの水晶をもう一度握りしめて光を纏う。

今度は両手両足に光を薄く纏わせると一気に加速して女子の元に行き、瓦礫を持ち上げて動かす。そのまま女子を横抱きに持ち上げてその場から離れる。この間はや三十秒である。

出久は他の受験生達がいるところまで下がると女子をおろし、状態を確認する。

「怪我はない？」

「あ、足を先挟んだ時に捻ったぐらい……」

「そっか、よかったよ」

それから出久は足の調子を軽くチェックした後近くにいた眼鏡をかけた男子に女子を預けて、もう一度お邪魔ロボに視線を向けた。

「眼鏡の君、僕いくからこの場は任せるよ？」

「な、君はあれと戦う気かい!? あれは何の意味もない0ポイントなんだぞ!」

「それでも、街を破壊するヴィランを放置するようなこと、ヒーローがするかな? それに物事に無意味なんてないよ」

そういつて出久は止めてくる眼鏡男子の静止の声を無視してまたお邪魔ロボに向

かっついていった。

「ハンドスラッシュじゃ威力が足りない…それなら全力で!!」

出久は走りながらも一度ペンダントを持って光を今自分が操作できる分引き出して、先ほどまで纏っていた光を足に集中させて一気に跳躍する。

数十メートルのお邪魔ロボの頭上まで跳躍した出久は、残っていた足の光のエネルギーを少しずつ放出する形でその場に固定すると、先ほど追加で引き出した光をまるまる使う形で技を繰り出すために、両腕を腰に引き絞りまた胸のあたりで交差、左右に大きく開いていく。

光が徐々に白に変化していき、大きな破壊エネルギーとして出久の両腕に集約し、技の発動準備が整った。

『ゼペリオン光線!!』

L字型に腕を組んで放つ白い超高熱光線、ヘドロヴィランにも放ったゼペリオン光線である。

その光線はお邪魔ロボに直撃すると、大きな轟音を立てて爆発した。そしてその瞬間

に、プレゼント・マイクからの試験終了の合図が流れた。

エネルギーを足から放出するのをやめて、着地に残りのエネルギーを使い綺麗に着地した出久。

その顔には、自分が全力を尽くすことができたとスッキリした顔だった。

そしてその出久を見ている男女がひとりづつ…先ほど助けた女子と、出久をとめた眼鏡男子だった。

「かっかっこええ……」

「(彼の行動は何か意味がある……? そうか! そう言うことか!!)」

女子はその出久の見せた技にシンプルに格好いいと思い、眼鏡男子は出久の行動が、この試験の本質を捉えていることに気がついた。

そしてその後リカバリーガールからの手当てなどを受けて、本日の受験は終了した。出久の結果はいかに……



## 示せ！光の力

入試から数日後…出久にも合否判定の手紙が来ていた。

とりあえず母親の引子に一人で確認したいといって自室にこもり手紙の封を開けた。

中に入っていたのは小さな機械。

何かと思つてしばらくいじっていると急に起動してホログラムを映す。出久はそのホログラムに映っている人物に目を見開く。

『私が投影された！』

「オールマイト?!」

思わず驚きの声を上げた出久。

そこからオールマイト自らのが写っている説明と入試の結果を伝えられた。どうやらオールマイトは今年度から雄英高校で教鞭を取るようで、今回の合否発表で合格者に伝えるサプライズらしい。そして出久の試験結果は筆記試験は余裕を持って合格、そして肝心の実技試験の好評になった。

仮想ヴィランロボを撃破することで得られる『敵ヴィランポイント』の他にもヒーローの重要な素質をそこでは測っていた。

それは守るべき一般市民を、そして同じ仲間ヒーローを助けようとする行動。それは『救助活動レスキューポイント』としてカウントされていた。

『人助け』を、『正しい事』をする人間を排斥するヒーロー科などあっていい筈が無い！綺麗事？ 大いに結構！綺麗事を実践するのがヒーローのお仕事さ！ちなみにこれは厳粛な審査制！そして……君のレスキューポイントは72ポイント！おめでどう！首席合格だつてさ！』

その言葉を聞いて出久は鼻の奥がツンとなり、少し瞳が潤う。

『こいよ少年！……ここが君のヒーローアカデミアだ!!』

「はい!!」

その言葉に、録画映像であつたが精一杯大きな声でこの映像の向こう側にいるオールマイトに返事をする。

こうして数年後、華々しく活躍する出久のヒーローとしての物語の1ページが、進む。

◇◇◇

「出久！大丈夫？忘れ物ない？」

「大丈夫だつてお母さん。昨日も散々確認したでしょ？」

四月某日、出久は自宅の玄関で母である引子とそんなやりとりをしていた。若干、出



久の顔は疲れているようにも見える。

実は先ほどの出久の言葉通り、昨日も同じやりとりをずっとしていたのだ。今日は入學式とガイダンスだけだから大丈夫だと何度出久は引子に説明したことか。出久は現在玄関で雄英高校の制服に身を包み、お気に入りの赤い靴を履いてその場に立っている。もちろん、ペンダントはちゃんと首にかけている。

出久は玄関近くに置いておいたりユックを取り、そろそろ時間だからと玄関を出ようとした。

だが、そこでまた引子に引き止められる。今度はなんだと出久は振り返ったが、今度の引き止めた理由は心配ではなくー

「出久、頑張つて。今の出久ちよーカッコいいよ！」

引子なりの声援だった。

「ーうん、いつてきますー！」

少し時間は進んで雄英高校。

出久は自分のクラスである『一年A組』のドアの前で立ち止まっていた。

(流石に、変な人はいないといいなあ…)

今出久の頭の中にあるのそのことだけである。

そもそも生来内気な出久からしたら基本的に正確に難があるような人種とは関わりたくないと考えてしまうのは仕方のないことかもしれない。だが、ここから自分のヒーローとしての物語が始まるのだからこんなところで足踏みはしてられない。出久は意を決してその扉を開けた。

扉を開けた先には、同じく雄英に進学してきた爆豪と、どこか見たことがあるメガネ男子が言い合っているところだった。

「机に足をかけるな! 雄英の先輩方や机の製作者の方に申し訳ないと思わないのか!?!」

「思わねえよ! テメエどこ中の端役だ!?!」

「俺は聡明中の飯田天哉だ!」

「聡明中? エリートってヤツか、ブツ殺し甲斐がありそうだなあ!!」

「なっ……君は本当にヒーロー志望なのかい?!」

(やってるよかつちゃん……)

出久はヒーロー志望らしからぬ言動をする爆豪に内心ため息をしながら黒板を見て、自分の席が番号順的に爆豪の後ろだとわかると今度ははつきりとしたため息が出てしまっ

た。しばらく言い合いを教室の教卓のあたりから見守っていると、教室に入ってきた女子が出久に話しかけてきた。

「あ！君は試験会場で助けてくれた人！」

出久は話しかけてきた女子の方を向き、その女子が自分が実技試験の時に助けた女子だと言うことに気がついた。

「やっぱり合格してただね〜！すごかったもんあのビーム!!」

ぶんぶんと手を振るって興奮気味に話しかけてくる女子に思わずクスリと笑うと、出久はその女子に自己紹介を始めた。

「ありがとう褒めてくれて：僕は緑谷出久です。君は？」

「私麗日お茶子、よろしくね！……いやー知ってるいて助かったー。今日は入学式とガイダンスだけなのかな？担任どんな人なんだろうね？」

思いの外ぐいぐいくる麗日に若干出久が引き気味でいると、出久の視界に寝袋が映った。中には人がいる。

「お友達ごっこがしたいなら他所でやれ。ここはヒーロー科だ」

寝袋の人物が喋った。

これからの入学式やガイダンスに夢を膨らませている麗日や、話していたクラスメイトのテンションが一気に下がるのを出久は感じた。

「ハイ、静かになるまで8秒掛かりました。時間は有限、君達は合理性に欠けるね」  
謎の寝袋の人物は教卓に立つと、出久達の疑問に答えるように自ら正体を明かす。  
「担任の相澤消太だ、よろしくね。早速だが、これに着替えてグラウンドに出ろ」  
そう言うと、担任の相澤は寝袋から学校指定の青いジャージを取り出した。  
何か早々、厄介ごとの匂いがして出久は顔がひくつくのが分かった。

「これから個性把握テストを行う」

「いきなりですか!? それに入学式は!? ガイダンスは!?!」

「プロになるならそんなモノ出てるヒマはない。時間の無駄だ」

突然の発言にクラスを代表するように麗日が質問する。しかし、けんもほろろ。そのまま相澤教諭によるこのテストの説明が始まった。

「君たちも中学までやってきた体力テスト、それに個性の使用を許可した状態で行って貰う」

手本として指名されたのは出久……ではなく、爆豪。

爆豪の『死ぬエ!!』と物騒な掛け声とともに投げられたボールは爆破の勢いと爆風、そして持前の強肩により700メートル越えの記録を叩き出した。

「なにこれ、楽しそう!」

「個性を思いつきり使えんのか! さつすが英雄ヒーロー科!」

早速の好記録と個性の使用が解禁されたことに沸き立つ生徒たち。しかしその雰囲気水を差す一言が相澤教諭から告げられた。

「楽しそう、か……これからの三年間でそんな腹づもりでいく気なら……そうだな、こうしよう。トータル成績最下位の生徒は見込みなしと判断して除籍処分としよう」

その一言で一気に緊張感が高まる。『理不尽だ』と抗議の声が上がるも、出久はそうは思わなかった。

平和はいつも続くとは限らない。いつ何が起こるかわからないのだから常にそのことを

「世の中は理不尽に溢れてる……自然災害やヴィランの事件。この程度の理不尽を簡単に乗り越えないとヒーローにはなれない。放課後とかに遊びたいなら諦めろ。これから三年間、俺達教師陣はお前たちに様々な苦難を与えて行く。入試でも言われただろ、Plus Ultra。その精神で乗り越えろ」

そして英雄最初の体力試験という“試験”が始まった。

最初は五十メートル走で、次々と個性をうまく使って好成績を出していくクラスメイト達。

「んじや次、緑谷準備しな」

出久の番がやってきた。同じように並んでいる爆豪などは両腕を後ろに回して個性の爆風で飛ぶようだ。出久はペンダントからいつでも『光』を引き出せるように準備してからスタート位置に着く。

そしてスタートと同時に足に『光』を引き出し、集中させてゴールまで一気に駆け抜けた。

結果は2・25秒……先ほど三秒台を出していたメガネ男子が目に見えて落ち込んだ。

そこからは驚異的な記録の連続だった。

握力では腕に『光』を集中させて測定ギリギリを記録し、立ち幅跳びでは実技試験でも行つた『光』のエネルギを放出して空を飛んでクラスメイトの度肝を抜いた。そうして全種目でかなりの好成績を記録し続けた。ただ、ハンドボール投げで出久は爆豪に声をかけられた。

「おいデク、いい加減本気出せや」

「え？」

「さつきから見たりやあ、あのヘドロの時ほどお前…力出してねえだろ」  
その爆豪の言葉に内心ドキリとする出久。

確かに、今までのテストの中で使っている『光』は入試の時と同じぐらいのもので、ヘドロヴィランの時に比べて力は使っていない。否、使えないのだ。確かにあのヘドロの後に訓練をしてある程度の『光』コントロールを可能にはできたが、正直まだまだうまくいっていない。

ゼペリオン光線などの光の巨人が使っていた技は何個か再現できるし、身体能力の強化も順調にできるようになっている。だが、『光』を引き出すときに自分が扱える程度の%に感覚的に抑えているのだ。

現在扱える程度は……3%。

と言っても、本来は50メートル級の巨人が使う力の一部なので3%でも安定して扱える分だけマシである。

「爆豪の言っていることは本当か？緑谷」

相澤が爆豪の言葉を聞いて緑谷に問う。

「まあ…はい、今以上に力を引き出そうとすると正直扱い切れないので……今自分が安定して扱うことができる全力でやっています」

「ほう……確かに合理的だ。テストを見た感じ、自分の個性をある程度コントロール

できてるみたいだしな。だがな、『全力』と『本気』は違う、除籍になりたくないならどつちも出してやれ」

そう言うって相澤は出久にボールを投げる。

ボールをキャッチした出久はボールを見たまま少し考える素振りをした後、ボールを投げる位置についた。

そして、出久がボールを投げる前に水晶を掴んだ瞬間に：一気に今までより強い光がクラスメイトと相澤の視界を染め上げた。

「なんだあ?」

「眩しー!!」

金髪のチャラそうな男子とピンク肌の女子が騒いでいる。

他のクラスメイトもいきなりの光の強さに似たような反応をして手を目の当たりに持っていく視界を遮っている。

そして光は金の粒子になって出久に集まっていき、バチバチと紫電を放ちながらオーラのような状態に収まる。

今までのテストで見た出久の『光』は部分的なものばかりだったのでその状態の出久を見てクラスメイトは息を呑む。

そして出久はオーラを纏った状態でボールを振りかぶり、叫んだ。



叫んだ掛け声は尊敬のヒーローと同じもの。

「スマアアアアアッシュ！」

そう叫んで投げたボールは周りに衝撃波を放ちながら飛んどん飛距離を伸ばしていく。見えなくなる程飛んでいった後最終的に相澤の持つ端末に出た距離は2589メートル、無限を記録した生徒以外の記録を震ませるほどの距離を出久は投げた。

投げた出久は少し動きずらそうにしているものの、平気そうな顔をしながらボールを投げた方向を見て、うまくいったことに安堵する。

正直、今の『光』を使った『全身強化』は賭けに近かった。

今までやった強化は四肢に光を集中させて、部分強化を行うもの。1箇所に集中させることで扱うエネルギーを操作しやすく、かつ低コストで使えると言う点が利点だ。エネルギーを操作しやすいので光線技も出しやすい。現在出久が一番使うことの多い強化の仕方でもある。

今回行ったのは『全身強化』、四肢以外にも強化をするため扱うエネルギーも多く、操作が難しい。下手な強化をしてしまうとエネルギーがコントロールを離れて暴発をしてしまう可能性があり、成功した回数は失敗した回数より少ない。

「けっ……やりやあできんじゃねえか」

「すげー!!約2.5キロ以上ってどんだけだよ!？」

「……超サイ●人見てえ」

出久の結果にクラスメイトも沸き立つ。

相澤は出久の様子を見た後に、すぐに次の番の生徒にやるように促した。

それから数種目のテストをやって、個性把握テストは終了。

出久の結果は総合成績一位の実績を見せた。

そしてそのま個性把握テストで一人の除籍を出すことなく終了した。

「ちなみに『最下位は除籍』というのは、君ら生徒を焚き付けるための合理的虚偽ね」  
「あんなの嘘に決まってるじゃない。ちよつと考えれば分かりますわ」

茫然自失とする飯田たちを他所に一位を勝ち取った八百万は呆れていた。

だが、そんな中一人相澤がついていた嘘に気がついていた人間がいた。出久である。

彼は相澤の目を見て、テストを始める前に行っていた除籍すると言うことが本気だと気がついていた。そして、先ほどの合理的虚偽と行っていた時の目もその時と変わっていないかった。

「(相澤先生は多分本気だった……全員がボーダーラインを超えたからたまたま除籍者が出なかつただけで……それに、その候補者の中に僕も入つた……)」

後に知ったことだが、相手の個性を消す『抹消』の個性を持つヒーロー・イレイザーヘッドの名を持つ相澤は過去に154回、昨年に至ってはクラス全員を除籍処分にして  
いる。

その彼にこの場で除籍を言い渡されなかったということは、基準点ボーダーラインをクリアできたのだろう。最下位だった故に安堵の涙を流す峰田実と同様に、出久の背中にも冷たいモノが伝った。

—————  
「おい、緑谷くん！一緒に帰ろー!!」

「あ、う、うん…麗日さん」

あの個性把握テストが終わり、帰路に着こうとした出久に声を掛ける女子生徒、麗日お茶子である。

なんとか返事した出久だが、少し吃ってしまった。朝の時の自己紹介では吃らず返事ができた出久だが、基本的に異性への耐性はあんまりない。何分小さい頃からずっとトレーニングをしていた本の虫ならぬトレーニングの虫であつた出久は小中学時代は最低限しか異性と関わりを持たなかつたために異性への耐性が本当に最低限しかない。

なので正直麗日と話すのも一杯一杯なのである。

「今日は大変だったねー!いきなりテストなんかあるんだもん」

「そ、そうだね…」

そう言いながら駅まで歩いていく二人、そんな二人に後ろから追う形で近寄る男子…朝爆豪と口論になっていたメガネ男子・飯田である。

「お二人とも!ぼ…俺も一緒にいいかい?」

「あつメガネ君だ!いいよー」

「あ、うん。大丈夫だよ」

話を聞けば、出久が『あの試験の全貌を見抜いていたのでは?』と感心して話をしてみたかったらしい。しかし出久が正直にそうではないことを伝えても『君の行動は紛れもなく尊敬に値すると』感心した様子だった。

それから三人で帰りながら入試のことや個性把握テストの内容を話しながら駅まで歩く。

ヒーローになるために幼少期からあまり友人と話しながら帰ることや遊ぶことをせずにトレーニングの毎日だった。そのことに出久は後悔はない…だが、学生になって初めてのクラスメイトとの穏やかな、楽しい時間を過ごし…これからの生活に楽しみができる出久だった。



## ヒーロー基礎学

個性把握テストから翌日、すぐに学校の授業が始まった。

ヒーローを育成する学校だけでなく、他の普通校に比べて科目数も多いこともあり授業の進行スピードはかなり早い。だが、雄英の高倍率を抜けてきたもの達であるクラスメイト達も苦戦はしているものの、授業にはついていけていた。

そして昼食は食堂でランチラッシュの料理を安価でいただき、午後から『ヒーロー基礎学』が始まる。

「わーたーしーがー……普通にドアから来た!」

ヒーロー基礎学を担当するのはオールマイト、No. 1ヒーローの登場にクラスメイトが沸き立つ。

「オールマイトだ!!?」

「本当に雄英の先生やってるんだ!」

「1人だけ画風違うよ。思わず鳥肌たった」

それから今回やる授業内容が『戦闘訓練』であること、そしてクラスメイト個人達が要望した『被服控除』という制度の下、各人の趣味や個性に合わせて製作された『戦闘服』コスチュームをそれぞれが受け取り、演習所βへ着替えて集合と言うことを聞いて、教室を後にした。

—————

更衣室でそれぞれが着替えていると出久は赤髪の男子に声をかけられた。

「なあ……お前の戦闘服コスチュームかっけえな！」

「あ、ありがとう」

出久は自分の戦闘服をみながら褒められたことに礼を言った、出久が着ている戦闘服はダイゴが所属していた組織の制服：GUTSスーツである。白をベースに赤、灰色の装飾が施された制服で耐熱、耐寒、耐衝撃性に秀でた特殊繊維でできている。そして背中には大きな白色のローマ字で名前が書いてある。

「俺、切島鋭児郎！よろしくな！」

「僕は緑谷出久、切島君の戦闘服もかっこいいよ」

そう言いながらお互いに自分たちの戦闘服を褒め合っていると他の男子達も話しかけてきた。金髪の上鳴電気、尻尾を持つ尾白猿夫、しろうゆ顔の瀬呂範太、どこか影がある雰囲気の常闇踏陰などある程度のクラスメイトと自己紹介をし終えると、ロボット

のような鎧の戦闘服をきた飯田がそろそろ時間だと言われ、演習所βに向かった。

「形から入るってことも大切なことなんだぜ！」

数分後、指定された場所に集合した僕たちにオールマイトが告げる。

「そして自覚するのさ！ 今日から自分は『ヒーローなんだ』と!!」

様々な戦闘服を着たクラスメイト達と共にオールマイトの前に集合した出久は、麗日に声をかけられた。

「緑谷君かっこいいね、なんか地に足が着いた感じ！」

「ありがとう麗日さん、麗日さんの戦闘服は…その、宇宙飛行士がイメージ？」

「あ、あはは…：…ちゃんと要望書けばよかつたくばつばつスーツだから少し恥ずかしいんだよね」

そう言いながら麗日は頭をかく。麗日の戦闘服は宇宙飛行士をイメージしたような装飾がなされたぴっちりしているスーツにヘルメットと少々異性に耐性のない出久には少し刺激的だった。周りもよく見てみると女子のクラスメイト達の中にも体のラインがはつきりしている戦闘服を着ている人が多い。

「まあ、私はまだ良い方なんよ。他の子は露出度が高くなってる子もいるみたい」



「どうりで…」

そう言つて出久は一際露出が激しいポニーテールの女子、八百万をみてすぐに目を逸らす。

だが麗日の言葉に出久は固まることになる。

「いやいや、実はヤオモモは注文通り。むしろ逆に隠されちゃってるんだってー！」

その後、クラスメイトの一人である峰田が『ヒーロー科最高！』とサムズアップを向けて同意を求めて来たが、出久は何も言えなかった。

「では戦闘訓練を開始するぞ！内容はヒーローとヴィラン二人ずつ分かれての屋内対人戦だ！」

オールマイトが説明した内容はクラスメイト達が予想していた屋外での訓練ではなく、屋内の戦闘訓練だった。なんでも、世間ではよく屋外の戦いが注目されることが多いが、統計で言うなら凶悪ヴィランの出現率は屋内の方が高く、監禁・軟禁・裏商売など『ヒーロー飽和社会』と呼ばれるこの現代において、真に賢しいヴィランは屋内と言ふ名の闇に潜むのだという。

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を学ぶための訓練さー！」

ダイビングスーツ風のコスチュームの蛙っぽい女子生徒、蛙吹の質問にオールマイトはにこやかに答えた。

そこからオールマイトによる詳しい今回のルール説明、クラスメイト達からの質問の嵐を経て、早速一試合目が始まる。

対戦カードが……

ヒーロー：Aチーム 出久&麗日。

ヴィラン：Dチーム 爆豪&飯田。

初っ端から面倒臭い組み合わせに、出久は少し神様を恨んだという。

—————

〈出久side〉

僕は自分の試合が一回戦目で、なおかつかつちゃんやんが相手にいる神様が悪戯をしているのではないかと思ったが、際は投げれたのだから腹を括るしかない。

ヴィランチームは先に会場であるハリボテの核兵器が設置されているビルに入り、五分後に僕と麗日さんのヒーローチームが突入する。突入するまでの時間は他のクラスメイト達やオールマイトがモニタールームに移動したりそれぞれのチームが作戦を立

てる時間だけど、きつとかつちゃんや飯田君は個性の関係上接近戦が主になる。僕は緊張を落ち着かせようと深呼吸をしていると麗日さんに話しかけられた。

「大丈夫？ 緑谷君」

「え、ああ、うん……ちよつとね」

「爆豪君のことかな？」

「まあね、幼馴染なんだけど……色々あつて。今回が初めてなんだ、正面からやり合うの」

そう言つて僕は右手に装着している黒いグローブを付け直す。

今まで、かつちゃんと真正面からやり合うことなんて、一回もなかった。

個性がないと診断されて、ダイゴさんに夢の中で認めてもらつてから無個性のことを馬鹿にしてくる連中なんて目もくれずにがむしゃらに努力してきたから僕は、学生時代に常に中心にいたかつちゃんとはほぼ会話はなかった。でも、時々衝突することはあつた。中学3年の時の進路のことや、ヒーローに関する出来事のたびにかつちゃんは僕につつかかつてきて、僕も時々言い返したりしたけど、個性を使用した『脅し』はあつても『やり合い』はなかったのだ。

「あれかな？ 男子の因縁的なやつ？」

「まあ、そんなところ」

そんな話をしていると、オールマイトからそろそろ始まるという通信が来た。

僕は寄りかかっていたガードレールから離れて、軽く体をほぐす。

「じゃあ、行こうか麗日さん」

「うん、ガンバロー!」

僕と麗日さんはそう言って会場のビルの入り口に向かった。

やり合うのは初めてだけど、勝たせてもらうよかつちゃん。

〈出久side out〉

『それでは時間だ! AチームvsDチーム、屋内戦闘訓練……スタート!』

オールマイトの宣言を聞いて、出久と麗日はビルの中に入っていった。まずは核兵器のハリボテを探そうと麗日と移動していると徐々に爆発音が一近づいてきた。出久はすぐにその爆発音を出している正体に気がついた。

(かつちゃんだ……!)

気がついた出久はすぐに迎撃をできるように『光』を引き出し足に纏って、爆豪の奇襲の瞬間に麗日を横抱きに抱え飛び躲す。

視線は爆豪から離さない出久は麗日をおろした後、腰を落として構えを作る。

「デク……よけんなや」

そう言った爆豪は鋭い目を出久に向け、冷静な表情で手のひらでボロボボと爆発を小さく断続的に発生させていた。

出久は構えた状態で爆豪を観察すると、一つのこと気がついた。

(顎が引けてる……)

出久の記憶にある爆豪は常に自信満々で感情的に人を見下すように顎が上に上がっているイメージが強かった。だが、今の爆豪は顎が引けていて冷静にこちらを見て次の動きがどうなるのか観察している。一筋縄ではいかないだろうと、出久は麗日に声を掛ける。

「麗日さん」

「ひゃい!？」

「悪いけど、先に行つてくれるかな……あとで合流しよう」

「う、うん！わかった！頑張つてね、緑谷君！」

そう言つて麗日はサムズアップして先に進んでいった。顔や耳が赤かったのはご愛嬌である。

制限時間がある以上、出久は早く先に行かせた麗日と合流したい。だが、爆豪が目の前にいる以上そう簡単にはいかないだろう。

「勝負だ……デク」

爆豪は一気に出久に接近し、出久が予想していた右の大振りの攻撃を放つ。

出久は最小限の動きでその攻撃を躲したあと、光を右手に収束させ、ガラ空きの胸部に掌底を放って吹き飛ばした。

だが、爆豪も諦めずに吹き飛ばされる瞬間に出久の顔面に爆破を叩き込んだ。二人ともダメージを相手から貰い少し顔が歪む。

「あっつー！」

「いつてえなあー！」

二人はそう愚痴りながらまたお互いに向かっている。

そこからは、二人が今まで培ってきた技術を使った、一進一退の攻防が続いた。

爆豪のスタイルは自身の持つ才能や訓練で鍛え上げた感覚で攻め続ける攻撃を主体にした技。

出久のスタイルは今までの分析を頭の中で引き出しながら相手の行動を予測し、攻撃を受け流しながら重い一撃を与える攻撃を主体にした技。

方向性には違いはあるものの、お互いに一歩も引かずに打ち合いを続けている。だが、それもすぐに終わった、出久が爆豪の攻撃の隙について、強烈な右ストレートを腹に叩き込む。そのモロに入った一撃に、爆豪は少しふらつく、ふらついている間に出久

は確保テープを巻こうと動いたが、持ち前のタフネスで反撃をされ出久は吹き飛ばされてかなり距離が離される。

「……やつてくれるじゃねえか、デク」

「そりゃあ負けられないからね。特に君には」

出久はそう言つてまた『光』をまた引き出し、今度は右腕だけに光を収束させて構え、手裏剣状の光線を繰り出した。

「ハンドストラッシュー」

入試の実技試験でも使用した手裏剣状の光線は、今回は連射する形で爆豪を狙い飛んでいく。

その連射された光線を見た爆豪は冷静に最小限の動きで躲し、お返しとばかりに自身の戦闘服の装備品である手榴弾の形をした手甲のピンに指をかける。

（かつちゃん個性はニトロのような汗を爆発させる個性、もしかしてあの手甲は……まさか!?!）

何をするつもりかわかったその瞬間に、ゾクリと嫌な感覚が出久の背中に奔る。

それと同時に、オールマイトの静止の声が聞こえた。

『爆豪少年、ストップだ！殺す気か!?!』

「死にやしねえよ、せいぜい気絶程度だ」

そうオールマイトに返事をして、ピンを抜く爆豪。そのタイミングは、出久が両腕に光を収束させたのと同様だった。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

爆豪の手甲から放たれた爆炎は、出久もろともビルの壁ごと破壊する……そう思われた。

だが、その爆炎は出久より後ろにいくことはなかった。

「……ウルトラシールド」

出久が両手を大きく開きながら前に突き出し金色に輝く膜を張っていた。

その膜は全く傷つくこともなく、巨大な爆炎を受け止めた。流石に爆豪も、そのことに動揺する。だが、それは別の場所で見ているクラスメイト達も同じだった。

「すげえ！緑谷のやつ爆豪のどでかいやつ防ぎやがった！」

「あいつの個性万能だな……どんな個性なんだ？」



「あの膜……どんな強度をしていますの……」

モニターに映る映像を見ながらクラスメイトたちは出久の能力に舌を巻いていた。個性把握テストで優秀な成績を収めた出久は、クラスメイト達からも注目の的だった。光を纏いながら行動をしていたらそれは目立つ、尚且つ光線なんて撃てるところも一部の男子からしたら憧れのようなものだ。個性黎明期前にあつた特撮のヒーローのような「ヒーローらしい個性」である出久は推薦入学者以外では注目度一位である。一方で、オールマイトも出久のことに注目していた。

あの「ヒーローになれるか」という質問の後、ヘドロヴィランで活躍した出久。

光を纏って人を救いに行った姿に、自身の秘密の後継者の候補として記憶していた。本格的にその後継者の候補へと見据えたのは入試の実技試験の時。同じ受験者を助け、逃げずに0ポイントに立ち向かった出久の姿に別室で他の教師達とモニターを見ていたオールマイトは次代のヒーローとしての才能を見抜いたのだ。

そして現在、オールマイトは教師として、出久は生徒として雄英にいた。

(見極めさせてもらうぞ……少年！)

「なんとか防げた……」

一方出久は、なんとか爆豪の爆撃を防げたことに内心ホッとしていた。

今使った技「ウルトラシールド」はダイゴが変身した光の巨人が使っていた防御技だ。本来なら広げた両腕のサイズの程のものしか出久は作ることができなかったが、自身の引き出した光をエネルギーに変換して防壁を作る工程をすつ飛ばし、『光』を薄く大きく張ることに爆炎を受ける直前に変更して成功させた。

出久はウルトラシールドを解除し、自分の自慢の一撃でもある攻撃を無傷で止められたことに動揺している爆豪に駆け出す。

だが、『才能マン』としての称号をいずれクラスメイトから頂戴する爆豪、すぐに対応しようとするが一瞬遅かった。

「終わりだ、かっちゃん！」

「なっ……」

爆豪が構えを終える前に出久が爆豪の右腕に確保テープをすれ違いざまに引っ掛けて、体勢を崩し手刀で首を叩き、気絶させる。そしてそのまま胴に確保テープを巻き付けた。

それと同時にオールマイトから爆豪確保の通信が入る。

出久は爆豪を壁に寄り掛からせるように体を動かし、先ほど入ってきた麗日からの通

信で、核のハリボテがある場所に向かう。

「今回は僕の勝ちだ。また勝負しようよ、かつちゃん」

◇◇◇

そこから出久はすぐに麗日と合流し、飯田を撃破。

その後に推薦入学者の一人である八百万の好評でオールマイトが言いたいことをあらかた言ってしまったり、もう一人の推薦入学者である轟焦凍が圧倒的な『個性』を披露したりなど個人個人気合の入った初のヒーロー基礎学の授業をやり切った。

そして場面は変わり、教室。

現在誘いを断った轟と爆豪以外のクラスメイト達が今回の授業のことで反省会を行っていた。

「じゃあの時すぐに突っ込むんじゃないかって一旦止まったほうがよかったのか？」

「でもそれじゃあ本当のヴィランの時はどう動くかな？」

「ならあの時の行動は……」

それぞれの試合の内容を振り返り、反省点や改善点を話している。

そんな中、一人ひたすらノートに書き込む男子がいた……出久である。

ガリガリガリガリガリガリガリガリ……

出久は今回の試合で見たクラスメイトの個性や戦い方を分析し、ノートに書き込んでいた。

自分なりに考察し、クラスメイトの個性の弱点や現在の改善点を書き起こしている。そんな出久に話しかける人間が一人、切島である。

「なあ緑谷、何書いてんだ？」

「あ、切島君。今日の授業で見たみんなの個性に関しての自分なりの分析をしてみてるんだ。今まで書いたやつとかもあるけどみる？」

そう言って出久は切島に書いているノートを見せた。

「おおサンキュー……ってすげえ細かく書いてあるな?！」

出久からノートを受け取った切島は、ノートに書いてる内容に思わず声を上げた。

今見せてもらったのは切島自身のページ。自身の試合内容から考察された個性の性質、弱点、改善点、成長させるなら自分はこうすると言った内容が綺麗なイラストとともにびっしりと書いてあった。

「スゲエよ緑谷！」

「あ、ありがとう」

切島が出久を褒めていると、他の話をしていたクラスメイト達が寄ってきた。

「なにになに〜？どしたの切島？」

「おお芦戸！緑谷のノート見せてもらったんだよ」

ピンク肌の派手な女子、芦戸三奈が切島が持っているノートを覗き込んだ。

「おー！たくさん書いてあるー！」

ノートを覗き込んでそういった芦戸。

そこから戦闘服の件で仲良くなった男子も集まってきて、遠巻きに見ていた女子達も

出久の周りに集まってきた。

「すげえ分析してんな緑谷」

「あの授業一回だけでここまでわかるものなのね……すごいわ」

「あ、ありがとう？」

出久は自分の日課になっていたノート分析がここまで高評価をもらうとは思ってなかったのか、少し戸惑いながら返事をする。

正直、引かれると思うっていた出久は少し嬉しくなった。

「プロヒーローとかの分析ノートも家にあるけど……今度持ってこようか」

「マジで!?!興味あるわ!」

それからは出久のノートで分析した内容の解説やクラスメイトと達の質問に答える時間となった。

後にこれが毎週放課後週一のペースで行われる研究会のようになるのは少し先の話。

## 委員長決めと黒い影

戦闘訓練のあった日の翌日、ホームルームは相澤の一言で始まった。

「昨日の戦闘訓練をVで見させてもらった」

内容はそれぞれの訓練内容を見て、相澤の視点から見た部分でのそれぞれの反省点などを話してくれた。

「さて、早速だが……」

相澤先生の言葉に緊張が走る。先日のように除籍などの罰則が課せられた難題を出されるのか、と身構える。

「君たちには学級委員長を決めてもらう」

「「学校つぼいのきたー！！！！」」

相澤の学級委員と言う思ったより普通の言葉に思わず叫ぶ生徒達。行事の仕事や教師の仕事を頼まれるなど色々と忙しくなるが、卒業しプロヒーローとなった場合、クラスメイトをまとめ上げていた実績は意外と重要になるのだ。

「はい！それ！俺やりたいです！」

「ウチもやりたいっす」

「リーダー、やるやる〜！」

「僕のためにあるヤツ☆」

「オイラのマニフェストはスカート丈膝上30cm！」

切島の拳手を皮切りに、殆どのクラスメートが自分になりたいとアピールしていく。収集が収まらない中、飯田が立ち上がり言った。

「静粛にしたまえ！ 委員長リーダーとは多を牽引する責任重大な仕事だ！ 『やりた』からと言ってやれるものではないはずだ！」

「周囲の信頼あつてこそ勤まる責務！ 民主主義に則り、真のリーダーを決めるのであれば投票による多数決で決めるべきだ！」

周囲が暴走しそうな中で冷静な判断を持つて、全員が納得する提案を出せる飯田は委員長リーダーに相応しいのではないかと思わせるほどにカッコ良かった。

「オマエの腕が一番ビシツと聳え立ってんじやねーか！」

「それに一週間も経つてないのに信頼も何もないと思うわよ、飯田ちゃん」

触れないでおこうと思つた部分への切島と蛙吹の鋭いツツコミに飯田君は凹んでしまった。



◇◇◇

そこから何故か出久に三票、八百万に二票入り委員長と副委員長に就任、あんなになりたがっていた飯田は出久が入れた一票のみでまた凹んでいた。結局いずくは自分では役不足だと委員長を辞退し、委員長は八百万になった。

場面は切り替わり昼休み、出久は放課後の個性訓練のためにどこかの施設を押さえようと麗日、飯田と一旦別れて職員室に向かっていた。

「どこか借りられるといいんだけど……」

出久はそう言いながら廊下を歩いていると急に大きな音の警報が鳴り始めそれと同時に放送が流れ始めた。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください』

その放送が流れた時に一気に食堂の方が騒がしくなる。

「なんだ!?!」

出久はいきよりの事態に驚くが、何やら窓の外が騒がしい。

窓の外を見てみると、記者やらテレビの撮影用のカメラを持っている人達が校舎の敷地内に入ってきていて、相澤とプレゼントマイクが対応をしていた。

出久はかなり早く予習のために雄英に登校して話しかけられることはなかった

が、現在雄英にはオールマイトが教師として在籍することになった事で連日記者達押し寄せているのだ。

だが、その記者達は雄英が保有している「雄英バリアー」に阻まれて敷地内には入れないはずだった。だが何故か今記者達は敷地の中に入っている。

「なんで記者達が？……っ!？」

出久は疑問を口にして窓を眺めていると、ゾワリとした感覚が全身を駆け巡り、ある方向に視線を向けた。職員室だ。

(なんだこれ…黒い何かが職員室の方にいる?)

なるべく警戒しながら職員室に近づいていく出久。

職員室に近づくとつれてどんどん感じた感覚は強くなっていき、ズキズキと頭痛の症状も始めている。

そして職員室についた出久。扉が少し空いていたので覗き込んだ。

中には白髪の男と黒い霧のような人形の二人組が職員室に並べられた机の前に立ち、漁っていた。

出久はその二人組を見て確信する。

先ほどから感じている嫌な感覚はあの二人から感じ取れるものだ。

(ヴィランか……?せめて映像だけでも!)

出久はそう思いスマホを取り出して撮影を開始する。

気がつかれる可能性もあったが、二人組は気が付かずに机を漁り、一つの紙を取り出す。

「よし、これが今度のカリキュラムだな」

「死柄木弔、あまり長居は見つかる可能性があります。早く退散しましょう」

「わかつてるよ、黒霧」

そういつて二人組は黒い霧の中に消えていった。

二人組が職員室から消えた瞬間に出久の感じていた感覚は消えてフツと出久の体が軽くなる。

「……はあ、気づかれてなくて良かった」

思わず、体の力が抜けてズルズルと壁を背にして座り込んでしまう出久。すると横からここに聴き慣れた担任の声がした。

「緑谷、何をしている?」

「あ、相澤先生……これ」

「ん?……つ、緑谷交戦はしていないな?」

「はい、放課後の個性訓練のためにどこか借りれるかなって思って職員室に来た時に

はずで中にいました」

「分かった、後はこっちで対応する。お前は教室に戻っておけ。悪いがスマホ預かるぞ」

「お願いします」

相澤先生にスマホを渡し、緑谷は指示通り教室へ戻った。

その後、昼休みにあつた後の『非常口』のあだ名を頂戴した飯田が、クラス内で話題になり、副委員長に就任したりしたのはまた別の話。

## U S J 事件 前

マスコミ（ヴィラン）の侵入があつた翌日の午後、本日のヒーロー基礎学の内容について話し始めた。

「今日のヒーロー基礎学はオールマイトに俺ともう一人も含めての三人体制で教える事になった。授業内容は人命救助、即ちレスキュー訓練。今回は色々と場所が制限されるだろう。ゆえにコスチュームは各々の判断で着るか考える様に」

相澤の言葉にクラスのテンションも上がっていく。

人を助けるための授業。それはある種ヒーローの本懐であるものでテンションが上がっていくのも当然といえば当然なのだが。

相澤はコスチュームを出すと訓練場は少し遠い場所にあるのでバスで移動するため、すぐに教室から出ていった。

出久はコスチュームは着る方……というか全員が着る方である。コスチュームは着る方が救助の際に瓦礫などで肌を切ったりする可能性があるのです、自分の身を守るためにもコスチュームは有効なものである。出久はさっさとコスチュームを着て、集合場所にきていたバスに移動した。

「くそ、こう言うタイプだったか……」

数分後、出発したバス内で副委員長に就任した飯田は凹んでいた。先ほどバスの前に集合した出久とクラスメイトは飯田と八百万の先導の元バスの中に出席番号の順に入っていたのだ、バスの中は市内とかで走っているタイプだったので、意味がなかった。出久は苦笑いしながら飯田をフォローする。

「意味なかったけど……いい練習にはなったと思うよ飯田くん」

そう言いながらなんとか出久は飯田のテンションを持ち直させる。

しばらく雑談をしていると、出久は蛙吹に話しかけられた。

「緑谷ちゃん、質問いいかしら？」

「ん？な、何かな蛙吹さん」

「あなたの個性ってどう言う個性なの？身体強化の個性に見えたけど、緑谷ちゃんはチームとか、バリアを張っていたじゃない？」

「え……あーうーん……」

蛙吹の質問に出久は返答に困ってしまう。

出久の『光』は異世界の光の巨人の力を首にかけている水晶のネックレスから引き出し自分が扱える程度で身体能力を強化したり、光線を放つたりするもので、そもそもこれは個性ではないのだ。クラスメイトのように体の中にある個性因子が活性化し、

「個性」になったものでもない。だから入学するにあたって個性屈を変更する際もかなり内容に悩まされていた。

「二応、個性の名前は『ティガ』って名前で届出してるんだ」

「『ティガ』？」

あまり効かない単語に蛙吹を含めた大半のクラスメイトは首をかしげる。

そんな中、その単語の答えを話したものがいた。委員長の八百万である。

「確か、マレー語、インドネシア語で数字の「3」という意味の単語ですね…」

「うん、そう。その意味であってるよ」

「でも、どうしてその名前にしたんだ？」

八百万の言葉に出久が肯定すると、今度は切島がそう聞いてきた。

「まあ、色々理由はあるんだけど…僕の原点みたいなものかな」

「原点？」

出久の答えに気になったのか切島が理由を聞くこうとするが、すぐに出久が話を続けた。

「まあ、それは今は関係ないから今度話すよ。僕の個性は身体能力を強化するだけじゃなくて水晶から引き出したエネルギーの放出も出来るよ。ただ、自分の許容限界で強化や光線の強さも変わってくるんだけど……」

「今の最大の限界は？」

「うーん……はつきりわかんないし感覚なんだけど、今の許容限界は大体3%ぐらいかな」

「3%!？」

出久の答えにクラスメイトは思わず叫ぶ。

あまり表情を変えない推薦入学者の轟でさえ、身を見開いて出久を見ている。

短い高校生活でもクラスメイトに印象を残し目立っている出久。その地味目なおとなしい雰囲気に対して入学初日の個性把握テストで見せたとんでもない身体能力や、この前のヒーロー基礎学で爆豪と戦いみせた戦闘能力や光線。まさに“ヒーロー”と呼ぶべき個性が目立たない方がおかしい、そんな出久の個性はまだまだ許容上限は小さいと言うことはまだまだ未発達な域であると言うこと。

「お前、それ100%使えるようになったら……」

「うーん、予想だと100%で個性なんか使ったらとんでもないレベルの被害が出そうだから使う機会はないと思うよ」

出久は夢に見た光の巨人と怪獣の戦いを思い出しながらそう言う。

光の巨人と怪獣の戦いはこの個性社会のヴィランとヒーローの戦いのスケールの何倍もある。怪獣と巨人が都市部で戦おうものならビルは倒壊するわ、地面は抉れるわの



大騒ぎ……そんな力をフルに使うものなら出久が走るだけで被害がとんでもないことになる。

そこから出久がクラスメイトの質問に答え、そこから約二十分。バスが巨大なドームの前に到着した。

◇◇◇

全員がバスから降り、相澤の引率の元そのドームの中に入っていく。

中には様々な施設があり、そのすべての施設の規模が大きい。有名な遊園地レベルだ。その中に凄さにクラスメイトが叫ぶ。

「USJかよ!!?」

「水難事故、土砂災害、火事、e t c……此処はあらゆる災害の演習を可能にした僕が作ったこの場所——嘘の災害や事故ルーム——略して”USJ!!”」

「本当にUSJだった……!!?」

少し権利関係の問題がないか考えたくなる略称だが、すぐに一人のヒーローが声をかけていた。

「待ってましたよ～みなさん!」

そのヒーローは宇宙服のような戦闘服を来ており、今回の授業に参加してくれる教師でもあるスペースヒーロー 13号だった。戦闘服のせいで素顔は見えないが、災害救助などの現場で活躍しているヒーローである。

13号の登場にまたクラスメイトたちはテンションが上がる。だが、すぐにその雰囲気は引き締まったものとなった。

13号が言葉を綴った内容とは、個性は人を簡単に殺せてしまうものである力だということ、そしてその力をこの授業では「助ける」ために使うことを学んでほしいということだった。

出久はその話を聞いて無意識的にネックレスの水晶を握っていた。水晶から引き出せている力はまだまだ小さいが、それでも人間サイズで使うとかなりの力で、これを相手に殺すつもりで使えば簡単に殺せてしまうものだ。

今回の13号の話を聞いて、そのことを改めて自覚する。

他のクラスメイトも話を聞いて、自身の個性のことについて考える仕草をしながらもその瞳にそれぞれの決意を宿す。

相澤も13号も、その生徒たちの顔を見て早速授業を始めようとした瞬間……

「つ……先生！何か来ます!!」

「やっぱりきたか……13号!」

「はい！みなさん、急いでここを出ますよ、緊急事態です！」

出久はあのヴィランが雄英に侵入してきた時に感じた嫌な感覚が背中を走り、すぐに感覚をたどって噴水広場の方を見ながら警戒を始める。

教師二人は出久の言葉を聞いてもともと予想していたかのように出久が警戒を始めた瞬間、避難することをクラスメイト達に促した。

だが、すでに遅かったようだ。

「緑谷、お前も避難しろ。ここからは教師の仕事だ。お前はクラスメイトと避難したら飯田と一緒に校舎の教員と連絡を……」

「あれ……オールマイトじゃないじゃん……じゃあ、前座で子供達殺そうか」

黒い霧が噴水の前に集まると、空間が歪みあの騒ぎで職員室にいた二人のヴィランと大勢のチンピラのような見た目をした人たちが現れる。

出久は自分もすぐ動けるようにしながら現れたチンピラを観察して相澤に報告する。

「相澤先生！近接異形型と遠距離型の個性が見た範囲で多いです！」

「報告ご苦労。そこまで別れば十分だ……移動しろ緑谷」

「はい！」

出久は相澤の言葉に答えてすぐに13号とクラスメイトと共に避難を開始した。が……

「逃がしませんよ」

瞬時に移動し、出口への道を封鎖するかのようになり立ち塞がる霧のような姿をしているヴィラン、チンピラヴィランをここに連れてくる役目も担っているヴィランは何処か紳士的な口調をしながらも明確な殺意と悪意を向けてくる。

「はじめまして生徒の皆様方。我々はヴィラン連合。この度、ヒーローの巣窟であり未来のヒーロー候補生の方々が多くいる雄英高校へとお邪魔致しましたのは他でもない。我々の目的、それは平和の象徴と謳われておりますNo.1ヒーローであるオールマイトに息絶えて頂く為でございます」

紳士的ながらもその言葉には殺気が含まれおり、そしてその内容を聞いた出久たちは固まった。オールマイトを殺すためだけに他のプロヒーローが多くいる雄英に来たというのか。だが、ヴィランの瞳には嘘があるようには思えない。つまり「本気」ということ。

そしてその直後、出久たちの方へ黒い霧が伸びてきた。

「生徒の皆様が金の卵という事も承知しておりますので……散らして捌り殺しにさせ

ていただきます」

出久は自身が浮かんでいくような感覚になりながら咄嗟に近くにいた人のコスチュームを掴み霧の外に放り出す、すぐに霧は晴れてその感覚はすぐになくなった。

◇◇◇

出久の視界に移るのは先ほどの場所ではなく、真下にある大きい湖向かって落下している途中だった。

「嘘だろ!?!」

そう言いながらも出久は冷静に光を引き出し足に収束させて訓練のために用意されていたであろう船のところまで飛んでいく。

「よかった緑谷ちゃん、無事だったのね」

「うおおおおお緑谷ああああ!」

船に着地するとそこには同じく船に避難してきたであろう二人、蛙吹、峰田がいた。

「蛙吹さん、峰田君も……無事だったんだね!」

取り敢えず、人数は少なくともクラスメイトと合流をすることができて安心する三人。だが、大変な事態になってしまったとため息をついてしまう。

「大変なことになっちゃったわね。オールマイトを殺す目的で雄英にヴィランが乗り込んでくるなんて……」

「うん。しかもあの言葉に嘘を言ってる感じもしなかったし、オールマイトへの対策も用意してるんだと思う」

「で、でもさオールマイトだけ!? 天下無敵のNo. 1ヒーローだけ!? 今までだつてオールマイト相手を考えてたヴィランを倒してきたオールマイトが負ける訳ねえつて!!」

不安になる心を無理矢理奮い立たせ気持ちを抑えようとすする峰田、そんな様子を察して言葉にはしないが梅雨と出久の二人はヴィランが明確な策がある事とそれも向こうが知っている筈であり、確実な対策があるからこそ来ているのだと改めて考える。

「とにかく、まずはここを切り抜けないと」

出久すぐに行動しようと言つて船の周りを見る。そこには水中や水に相性の良い個性を持ったヴィランがたくさん水影から顔を出していた。この場所は完全なホームグラウンドとなつているのだろう。もしかしたら他の場所に飛ばされているクラスメイト達の場所にもそれぞれの場所に相性の良い個性を持ったヴィランがいるのかもしれない。

（急いで他のみんなとも合流しないよ）

「とりあえず、僕がヴィランたちの気を引くから蛙吹さんは峰田君と向こう岸まで飛べる？」

出久はそういうとすぐに光を引き出して自身の足にエネルギーを纏う。

「え、ええ私の個性で向こう岸には行けるけど、緑谷ちゃんは大丈夫なの？」

「僕はさつきみたいに飛べるから大丈夫」

「で、でもよう…学校の先生たちが助けに来るまでここで隠れとけば……」

峰田の提案に出久は首を振って答える。

「オールマイト対策がある可能性が高いのなら、学校にいるプロヒーローとかでも厳しい秘密兵器が相手にはあるはずだよ。なら今僕たちがすべきことは早くみんなと合流してここから避難し、先生方の負担を少しでも減らすことだ……それに、こんなところで逃げてちゃ、ヒーローになんてなれないよ」

そう言つて出久は蛙吹にすぐ移動することを頼むと一気に跳躍し、上空に滞空してさらに光を引き出して右手にエネルギーを集め、引き絞る。

蛙吹が峰田を抱えて向こう岸に飛ぶ体制になったのを確認し、ヴィラン達の注意を引くために大きな声を発して挑発する。

「っつちだ！くそヴィラン共!!」

ヴィラン達が自分に注目したのを認識して、蛙吹が飛んだ瞬間に右手を振り抜いた。右手に集まっていたエネルギーは右手が振り抜かれたのと同時に大きな塊のようになって湖の中へ飛んでいく。

飛んでいったエネルギーの塊は、水面に触れた瞬間に湖の底が見えるほどの衝撃を作り出し、衝撃が治るとすぐに湖の水が元に戻ろうとする動きで水面に渦が発生する。

水の中にいたヴィラン達はその渦に巻き込まれて身動きが取れなくなっていた。すると出久と別の方向から紫色のボールのような物が飛んできていた。その方向を見ると、蛙吹の抱えられて向こう岸に飛んでいる途中の峰田が自身の個性であるもぎもぎを投げ込んでいるのが目に映った。

「オイラだってえ……オイラだって！」

そう叫びながら必死にモギモギを投げる峰田。

もぎもぎでくつついてしまったヴィラン達はただせさえ渦に飲まれて上手く動けない中もぎもぎで身動きが完全に取れなくなってしまうそのまま渦に飲まれて行った。

「よし……！」

出久はヴィラン達が完全に渦に飲み込まれて見えなくなるまで見届けて、向こう岸に着いた蛙吹と峰田の方へ飛んでいく。



「二人とも怪我は!？」

「私は平気よ。峰田ちゃんが少し個性の使いすぎて頭から出血したくらい」

「へへ…どうだ緑谷。オイラも役に立っただろ?」

出久の言葉に蛙吹はそう答え、峰田を見る。

峰田は個性の使いすぎで頭から出血しており少し痛そうにしているものの、ドヤ顔をしながら出久と蛙吹に向けてサムズアップした。その顔にはあの船で慌てていた時のような恐怖心もあつたが、何よりも勇気が見ることができた。

「…うん、カッコよかつた!」

「カッコよかつたわよ、峰田ちゃん」

峰田のサムズアップに、出久と蛙吹は笑って答えた。

そこから峰田の出血が治まるまで警戒をしながらゆつくりと分散させられる前にいたUSJ入り口を目指し向かっていく。そこにさえ行ってしまえば他のクラスメイトや相澤、13号の教員であるプロヒーローと合流しある程度安全であると思つたからだった。

だが、出久には少しだけ懸念点があつた。

あの霧のヴィランといた手だらけのヴィラン—黒い霧のヴィランに職員室で『死柄木弔』と呼ばれていたヴィランである。出久が感じた嫌な感覚は、あの手だらけのヴィ

ランから感じていたものだった。

出久自身には感知系の個性はない。

だが、あの職員室や、ヴィラン達がU S Jに侵入してきた時感じた感覚は、明らかにヴィランから感じた黒い『負の感情』のようなものを感知していると出久は思っている。実は水難エリアのヴィラン達からも似たような感覚が感じられていた、その何倍もの嫌な感覚をあの死柄木弔から感じられたと言うことは……かなりの脅威である可能性が高のだ。

そして、その懸念は現実のものとなった。

「おいおいこんなものかよ……イレイザーヘッド」

出久達が隠れながら噴水広場の近くまで来て見た光景は、脳がむき出しの巨漢にボロ雑巾のようにされた相澤だった。

